

英米文学と日本文学の怪奇小説の比較研究
——カナダにおける幽霊との出会いにかんする報告——

金 井 公 平

A Comparative Study of Weird Tales between English and Japanese Literature——Accounts of Encounters with Ghosts in Canada——

Kanai Kohei

Most Japanese are not familiar with Canadian ghost stories. But throughout the world there are many accounts given by those who eye-witness ghosts, those who hear the voices of ghosts and those who have mysterious experiences concerning ghosts. In Canada true ghost stories are far more popular than fictional ones. Out of those true ghost stories or accounts, several stories, which I found interesting, will be introduced and be discussed.

The first account describes a ghostly appearance of late and former Prime Minister William Lyon Mackenzie. During his lifetime it was a secret shared only with intimate friends that he was a closet spiritualist. The person who had a conversation with the late Mackenzie King was Percy J. Philip, a Scotsman by birth, a New York Times correspondent for 24 years. He was a confidant of Mr. King. He talked with Mr. King for about 2 hours on a park bench nearby Kingsmere, Que., where Mr. King had owned his Summer house.

The second is one of the two passages titled “Wild places,” which comes from L. M. Montgomery’s private writings. Montgomery was famous as the author of “Anne of Green Gables” books. The passage evokes an atmosphere suitable for ghost stories both real and imagined. “An Early Morning Visitor,” the third account is a typical true-life ghost story. The writer, F. D. Blackley, Professor of History, University of Alberta, recalls a scary episode about a ghost, an old man with a lantern which appeared in an abandoned hotel. “The Mackenzie River Ghost,” the fourth account is the most famous true ghost story of the Northwest in Canada. Roderick MacFarlane, a fur trader, and Fellow of the Royal Geographical Society, was the principal witness of the eerie events which took place during the transfer of the remains of Mr. Peers by dog train from Fort Good Hope to Fort Simpson on the Mackenzie River over 500 miles. The fifth and the last account comes from a phone-in segment on Halloween in 1999. The caller, a new mother talked about a ghost she could not see. But while she was soothing her baby daughter, not quite 1 year old, she became aware that the baby was playing patty cake with someone else. It seemed that the baby could see it because the baby’s eyes followed it around the room.

These 5 accounts are all “true ghost stories.” Why in Canada are these true ghost stories so popu-

lar? One reason is the literary tradition of fictional ghost stories is not strong enough as in Great Britain or in Japan. The other one is that many Canadians, being curiosity seekers, enjoy playing a judge in deciding whether the “true ghost stories” are really true or not.

《個人研究》

英米文学と日本文学の怪奇小説の比較研究

——カナダにおける幽霊との出会いにかんする報告——

金 井 公 平

おそらく多くの日本人は、カナダの幽霊にまつわる話だと言われても、英国の幽霊物語と違って、あまり具体的なイメージは浮かばないだろう。しかし世界中どこにでも幽霊の姿を目撃したり、声を聞いたり、幽霊にまつわる何らかの不可思議な体験をした話があるように、カナダにも実に豊富で多様なそうした話が、過去にも現在にも存在している。そして英国のように、フィクションの世界での幽霊に人気があり親しまれているのと事情が違い、カナダでは実際に起こったとされる、幽霊にまつわる出来事の体験が多く読まれている。そこで数多くあるそうした体験の報告のなかから、興味深いと思われるものを紹介しながら、フィクションと比較することによって、その特徴を明らかにしたい。

(I)

まずは最も有名で話題を呼んだ、カナダの10代目首相ウィリアム・リオン・マッケンジー・キング(1874-1950)の幽霊の話から始めたい。ジョン・ロバート・コロノ編集による『マッケンジー・キングの幽霊とその他のカナダにおける幽霊出現の個人的報告』(1991)には、故マッケンジー・キング首相の幽霊にかんするラジオ報道や、その後が続いて出た新聞、雑誌などの記事が、だいたい発表日順に、間違いも混乱もそのまま掲載されている。ただし幽霊と会話し、その話を最初にラジオで語った、パーシ・J. フィリップ本人のその時の原稿は掲載されていない。それから編集者は、元首相は熱心なスピリチュアリストであったが生前そのことを秘密にしていたので、ごく親しい友人か仲間しか知らなかったと紹介している。

マッケンジー・キングの幽霊と出会い2時間ほど会話を交わしたパーシ・J. フィリップという人物は、英国のスコットランド生まれで24年間年ニューヨーク・タイムズの記者を勤め退職していた。故人である元首相と会い会話を交わした体験を、彼は1954年9月24日 CBC トランス-カナダ放送で語った。フィリップ自身はスピリチュアリストではなかったが、記者時代にもまた幼少の頃にも不思議な体験をし、また故マッケンジー・キング首相とは生前親しい間柄だった。2人はよく故人の愛犬パットを伴って一緒に散歩をしていた。フィリップは1955年12月『フェイト・マガジン』に「私はマッケンジー・キングの幽霊と語った」というタイトルの文章を書き、元首相がスピリチュア

リストであることを、生前吹聴こそ決してしなかったが、特に秘密にしていたわけではないと述べている。ヨーロッパへの航海を共にした大西洋の船上で、元首相は、自分の父母のみならず、リンカーン大統領のような歴史的に著名な人物とも、直接あるいは霊媒を通して交信していたことをフィリップに語っていた。

話の本筋に入ろう。1954年6月のある晩フィリップはケベック州キングズミヤー、故マッケンジー・キング首相のサマーハウス近くの公園のベンチに座っていた。すると、突然彼は自分のすぐ横に何者かの「存在」を感じ取る。ため息もうめき声も聞こえなかったが、深い平安が訪れていた。フィリップは顔を向けて相手の姿を確認しないまま、「今晚はマッケンジーさん」と話しかけた。すると相手は、「今晚はフィリップ。話しかけてくれて嬉しいよ」と答え、会話が始まる。やがて話は政治から国際状況に及んだ。故人は「民主政治にとっては、いかなる政党であろうと政権の座に長く留まりすぎたり、あるいは遠ざかり過ぎたりすることは不利益になる。国民の深いところにある本能との繋がりを失うからだ」と語る。また故人はかつての同僚が誰1人としてキングズミヤーの自分の所に来ないとこぼし、昔はずいぶん彼らを助けたのに、忙しさにかまけて私のことなど忘れてしまっているのだらうと言った。

その2時間に及んだ会話が、はたして本当に起こったのかどうかに関し、フィリップ自身はラジオ放送で次のように語ったとされている。

会話をしたと思っているだけではない。会話を交わしたことを確信しているのであり、それがまったく普通で自然なことに思われた。もちろん元首相が4年前に亡くなっていることは十分承知していた⁽¹⁾。

その晩公園のベンチに座っているフィリップの他に、あたりに誰もいなかった。その公園がある一帯は故マッケンジー・キング首相の所有地であったが、遺言で死後カナダ国家に寄贈されていた。ただ一人座りながらフィリップは、故人のことをしきりに思っていた。そこである意味では、受け入れ態勢ができていたといえよう。丁度そのとき、彼は自分の隣に誰かがいると感じたのである。故人に話しかけたフィリップが、「あなたのことを考えていました」と言う、故人は、「ええ、分かっていましたよ」と言う。しかし霊界のしきたりで話しかけられるまで話してはいけないことになっている。というのは霊界の人間がむやみにこの世の人間に話しかけると騒ぎになるからだ、誰にも話しかけてもらえないのは悲しいと元首相の霊は語った。それに対してフィリップは、誰もいない暗いガランとした部屋に向かって、「誰かここにいますか」と話しかけるのは、怖いですよという。すると故人は、空いている部屋などほとんどなく、どの部屋も話しかけて欲しい孤独な霊で溢れている場合が多いが、名前を親しみを込めて、それもきちんと名指しで話しかけられる必要があるのだと説明する。さらに霊界は現世の続きの様なものであり、同じ成長や変化をするが、やがては現世の経験をすっかり忘れ、あれこれ思い悩み後悔することもなくなると言う。また元首相は最近のカナダ情勢について、住宅問題、動力問題など進行中のプロジェクトについていろいろ知りがった。その様子から

察すると、興味を持っているが新しいカナダの情勢にはうといようであった。

フィリップはCBCのラジオ放送で語ったこれらの話を「ファンタジア」と呼んだ。彼には多くの人がそんなことが本当に起こったと信じないだろうと分かっていたし、「私自身信じているのか確信が持てない」と語っている。しかし同時に、そのときの故人とのやり取りが、非常に現実味があり、少しも普段と変わるところがなかったとも言っている。ところでフィリップは話の始めの方で、先に引用したように、「会話を交わしたことを確信している」と語ったとされている。それが1955年12月の文章では、少しトーンが変わってきている。話の現実性は依然として強調しつつも、誰も彼の話を信じないことに影響されたのか、「私自身ほんの少しではあるが、それが本当に起こったことなのか、少なくともそれがどのように起こったかについて確信が揺らいできた」と書いている。「私は眠り込んで夢をみたのであろうか。(それとも)これは科学では説明の出来ない事態だったのか」と彼は自問している。これを読むと彼自身かなり懐疑的になっていると考えたくなる。しかしスコットランド生まれのフィリップは、基本的には幽霊を否定していない。それから夢と現実の区別が曖昧な状況で幽霊を見た話を、実は幼少のころ父親から聞かされ、自らもまた同様な体験をしているのである。

1955年1月『リパティ』に掲載した「私とマッケンジー・キングの幽霊との会話」の中で、「私の生まれたスコットランドでは、われわれは幽霊を信じている」と書いている。牧師であった彼の父は、フィリップの祖父がよく夢の中や、目覚める直前の眠りの中に登場してきて、目が覚めてからも全てがあまりに現実味に溢れていたもので、とても夢の中の出来事とは思えない、と語っていた。当時わずか3歳だったフィリップのもとにも、祖父は手織りの格子縞肩掛けに身をつつみ幾度か訪れた。あとになって自分が寝ていたのか目覚めていたのか、判断が付かなかった。「しかし全ての会話が、祖父のかすかなアバディーンシャーのなまりに至るまで、あまりに生き生きとしているので、実際に起こったことだと確信した」のである。幼少の頃の記憶に基づくフィリップのこれらの言葉を読むと、故マッケンジー・キング首相との会話が、実際に起こったことかどうかについて判断するのは、かえって難しくなる。

こうした状況のなかでフィリップが終始一貫して確信しているのは、「キング氏自身は私を信じてくれるだろうという」ことである。元首相は生涯独身で通したが、非常に寂しがりやで、しかも亡くなった肉親への情愛が極めて強かった。前にも触れたが、スピリチュアリストであった彼は、霊界の肉親と頻繁に会話を交わしていたことを、かつて航海を共にしたヨーロッパに向かう船上でフィリップに語っていた。つまりフィリップが元首相と会話を交わしたのと同じように、元首相自身が生前霊界の人々と交信していたのである。「私の場合、一人で、直接交信する方法が最高であると分かりました」と言う元首相は、さらに続けて「あの世の人々に、あたかも彼らがそこにいるかのように話しかけることによって、ほとんど偶然に交信方法を確立し、すぐに返答してもらえるようになりました」とも語っている。

最後にフィリップがキング氏の姿をはっきり目撃したかどうかについて、1955年12月『フェイト・マガジン』に掲載された文章が詳しいので、少し検討してみたい。始めのうちフィリップは顔を向け

ないまま話していたが、やがてちらっとキング氏を一瞥すると、生前と同じように目がキラキラ輝いているようにみえた。また別れを告げるときに、立ち上がって初めて正面から向き合って姿を見ると、「生前私が知っていたのとまったく変わらないように、かつてまさにこの同じ場所で語り合ったときと同じように見えた」とある。キング氏は、「ぜひまた戻ってきて私と話しをしてください」と言う。フィリップは別れの握手をしようと手を差し出すが、そのときにはもう元首相の姿はなかった。そこで幽霊に直接接触するところまではいかなかったが、しっかり目撃体験をしたことが分かる。

以上紹介してきたようにフィリップの話はいろいろな面で興味深いが、マスコミの取り上げ方は、話の内容を正確かつ忠実に伝えるということよりも、出来るだけセンセーショナルに、内容を歪曲してまでも面白おかしく書き立てることであった。1955年1月『リパティ』に載った「私とマッケンジー・キングの幽霊との会話」の中で、自分自身も記者であったフィリップが、あえて同業者にたいし、そのあまりにいい加減な取り上げ方を批判している。彼の話しはカナダやアメリカ合衆国に、大変な反響を呼んだのであるが、まともに取り合おうとしない人間が多く、中には、どんなブランドのウィスキーを飲んでいたのかと問い合わせてくる者までいた。かつての同僚の一人が、フィリップの住むコテージに駆け込んで来て、「問題は、それが真実なのか、それとも真実ではないのかだ」と陽気に叫んだことがある。この同僚の言うとおり、フィクションと違い実際に目撃された幽霊の話に関しては、その信憑性、つまりそれが事実なのかどうかは常に問題となる。

(Ⅱ)

目撃された幽霊の話が事実かどうかを確かめるのは、ほとんどの場合不可能である。何故なら多くの場合、目撃をした人物の記憶による証言や報告が手掛かりのすべてであり、物的証拠や、物理的痕跡が残されていることは極めてまれである。またたとえ何らかの物的証拠や手掛かりと称するものがあつたとしても、その信憑性そのものが、慎重に検討されなければならない。投稿され、あるいは収集され、文献としてまとめられている話だけが残っている場合は、物的証拠を検討する必要はない。

それでも目撃された幽霊の報告をまとめた多くの編集者は、それらの報告が真実なのかどうかを問題にしている。なんらかの態度表明をすることが、避けられないのかもしれない。『マッケンジー・キングの幽霊とその他のカナダにおける幽霊出現の個人的報告』を編集した J. R. コロンボも、序文で「幽霊は存在するのか。幽霊屋敷はあるのか。死者は生者と交信できるのか」と書き出している。だがコロンボは、これらの問題を考察するかわりに、この本は「読者にカナダにおける幽霊出現の真実の物語を提供しているのであり、1人称で語られる目撃の報告は、フィクションとしてではなく事実として提示されているのであると」強調するにとどまっている。つまり収録されている記録そのものが答えになると考えているのである。あまり説得力があるとはいえないが、コロンボは1年後の1992年に『暗いヴィジョン：カナダにおける神秘的体験の個人的報告』を編集している。その序文では、「目撃者は1人称単数で書いていて読者や聞き手に直接的に衝撃を与える。そうした衝撃を与えることこそが本書の目的である」と書いている。基本姿勢は変わっていないようである。しかしこ

ここでは、出来事や経験、エピソードが、本当に記録されている通りに起こったのかを、読者がかならず知りたがることを予期している。

コロンボはまず2通りの解答を想定している。懐疑論者は、「ここに書かれているようなエピソードは起こらなかったし、また起こり得るはずもなかった。これらの事柄のどれ1つとして起こったという証拠がない。扱われているのは、どれも愚かしく、インチキで、曖昧な認識、あるいは非論理的思考である」と言うだろう。一方信じる者は、「こうしたことが起こった、多くの歴史のおよび同時代的証拠がある。数多くの人々が、書かれている現象の現実性を認めるだろう。幽霊や予知は広く信じられている」と言うであろう。だが大多数の男女は、嘲笑的な懐疑論者でもなければ、盲目的な信者でもない。大多数は「好奇心を持った探求者である」のだから、両極端に走らず「判断を保留することが可能」である。だから「そうした問題については心を開いた状態にしておくことが賢いやりかた」なのである。

(Ⅲ)

さて次の話に入ろう。『赤毛のアン』シリーズで、わが国でも有名な、プリンスエドワード島出身のルーシー・モード・モンゴメリィ (1874-1942) が書いた個人的な覚書のようなものである。幽霊こそ登場しないが想像力豊かな内容であり、1ページにも満たない短い文章なので、あまり省略せずに紹介したい。

1907年11月18日月曜日

今晚、というより丁度夜の帳が降りる頃恋人横丁を歩いた。これまでそんなに遅くそこに行った事がなかったので、少し怖かったが、怖さがちょっと楽しくもあった。いつもと違い雰囲気が一変していて、謎めいて、よそよそしく薄気味悪かった。慣れ親しんでいた木々は、昼間の陽気さを失い、耳障りな音を出し突然敵意を持ったかのようなだった。気のせいか私の回りにひそやかな足音を聞き、そして人類の幼児期、太古の昔からの理性を超えた恐怖を、暗闇を恐れ闇に潜む見えない危険にひるむ気持ちを感じた。私の20世紀の理性が何とか恐怖を抑えていたが、もう少しで恥も外聞もなく逃げ出すところだった。足早に立ち去りながら、そこはいまだに異教のフォーンあるいはサテュロスの支配する、キリスト教の教化の及ばない未開な場所であると感じた。昼間太陽に姿をさらすことなく、夜になると力を取り戻す、闇に潜む生命があるのだ。

普段身近に親しんでいたものが、突如変貌し、異質でかけ離れ敵意すらおびた存在になるときに感じる恐怖は、人間の抱く根源的な恐怖である。この短い文章の雰囲気は、米国の恐怖小説作家 H. P. ラヴクラフトの作風を髣髴とさせ、この文章を発展させると、壮大なスケールの優れた恐怖小説が誕生しそうである。恐怖小説は長大なゴシック小説から生まれたジャンルであるが、19世紀後半から英国で人気が出た幽霊物語は、基本的に短編小説であり、長さにおいても内容的にも幽霊目撃の報告に近いといえる。そこで典型的ともいえる幽霊目撃の報告を紹介したい。報告者はアルバータ大学の歴史学名誉教授 F. D. ブラックレイで、1939年まだ学生時代の頃の体験で、「早朝の訪問者」という

タイトルが付いている。長さは1ページより少し短い程度である。

(Ⅳ)

第2次世界大戦が勃発する前の夏、ガールフレンドがオンタリオ湖に面した小さな町でアルバイトをしていたので、ブラッドレイはトロントからヒッチハイクをして会いに行く。2人で楽しい時を過ごした後ガールフレンドと別れるが、既にあたりは暗くなっていた。町のホテルはチャイムのうるさい時計台のすぐ近くにあって、金もなかったので、彼は湖畔をガールフレンドと散歩したとき見かけた、放棄され無人となったビルで夜露をしのぐと決める。湖から少し離れた木立の中にあるそのホテルとおぼしきビルには難なく入れ、2階に上がる。そこには長い中央ホールがあり、ホールに面して両側に多くの部屋が並んでいた。一番奥の部屋に入ると、ポーチの上の屋根を見おろす窓が付いていた。彼は自分のレインコートの上に横になる。まだ暗い4時頃、大きな物音を聞いたように思いびっくりして飛び起きる。もっとも今では気のせいだったと確信している。立ち上がってホールの方を見ると、階段の窓からかすかに差し込む月明かりの中を、ランタンを下げた臃な人影がこちらにやってくる。その人影はまるで誰かを探しているように部屋を一つ一つ調べている。ホールのはじめの彼の部屋に近づいたとき、邪悪さに満ちたその顔が見える。それどころかその体を通してホールの向こう側の細部がすけてみえる。ランタンを下げた人影が部屋に入ってくる前に、彼は窓からポーチの屋根に降り、そこから地面に飛び降りる。そのとき彼は今まで自分がいた部屋にランタンの明かりが耀くのを見る。

町に行き終夜営業の軽食堂で、気分を落ち着かせるためコーヒーを飲み、朝食をとった。店の主人に、例の放棄されたビルのことを聞くと、そのビルはホテルだったが成功しなかったのだと話し、「そこにはランタンを持つ老人の幽霊が出ると、地元の間人というが私は信じないね」と付け加える。ブラッドレイは、自分は信じていると言わなかった。

廃屋の幽霊という題材は確かにありふれているが、無駄なく手短かに語られるこの目撃報告は、フィクションの幽霊物語のように、うまく構成されている。次は19世紀のこれこそカナダ的だといえる「本当の幽霊の話」を紹介したい。

(Ⅴ)

「マッケンジー川の幽霊」はカナダ北西部で最も有名な話で、王立地理学協会のフェローで、北西部地域で40年に渡って毛皮商人であったロデリック・マクファーレン（1835-1920）によって報告されている。彼が1859年から60年にかけて起こった気味の悪い出来事の主要な目撃者であり経験者である。この報告は何度も雑誌や幽霊目撃報告集などに取り上げられたが、ときには半分事実で半分フィクションであるという扱いを受けている。

1853年3月15日に北米北極地方、マッケンジー川地区のフォート・マクファーソンでオーガスタ

ス・リチャード・ピアーズが33歳の若さで亡くなった。彼は毛皮商人でハドソンズベイ・カンパニーの支店長を務めていた。アングロ-アイルランド系で友人には尊敬され先住民には慕われていた。11年間の遠隔地での勤務のあいだ本社であるフォート・シンプソンで何シーズンかすごしたことがあった。生前フォート・ノーマンとフォート・マクファーソンの両方の住人だったが、死の床で自分の骨はそのどちらの場所にも埋めて欲しくないともらしたことが伝えられていた。遺言が残されているともいわれていたが、いくら探しても見つからなかった。

この報告を書いたマクファーレンは1852年にはハドソンズベイ・カンパニーに勤めることになり、翌年任地であるフォート・シンプソンに赴くが、それはピアーズの死後5ヶ月のことであった。その地でピアーズの未亡人と子どもたちに会う。1859年の秋、再婚した婦人とその夫の切なる要望によって、ピールズ川の埋葬地からマッケンジー川のフォート・シンプソンにピアーズの遺体を運ぶ取り決めがなされた。具体的にはその冬のあいだにチャールズ・P. ゴーデットが、フォート・マクファーソンから300マイル離れたフォート・グッド・ホープまでその遺体を運び、そこからマクファーレンが南に500マイルも離れた最終目的地フォート・マクファーソンまで運ぶという過酷な旅であった。フォート・マクファーソンは北極圏限界線よりさらに1緯度北側にあり、付近の土壌は湿地で地表のすぐ下は凍っていた。掘り出された死体は埋葬されたときとほとんど変わらない状態のままで、大きな棺に移され、ヘラジカの皮革で包まれ、犬橇に紐で縛り固定して載せられた。その不必要なほど大きな棺を橇で、でこぼこの氷のかたまりだらけの氷原上を運ぶのは、人間にとっても犬にとって大変な労働であった。

1860年3月1日ゴーデットが死体をフォート・グッド・ホープまで配送してきて、マクファーレンに引き渡した。ファーレンは棺を運ぶ三匹の犬に引かれる橇の1チームと、寝具、旅行用具、食料などを運ぶ橇の1チームを編成し出発した。棺を運ぶ犬橇を率いるのは、先住民イロコイ族マイケル・トーマスであった。マクファーレンはスノーシューズをはいて湿地を歩き、常にはない深い雪とでこぼこの氷に苦しみながらフォート・グッド・ホープから200マイルの距離を7日間移動し、もっとも近いフォート・ノーマンまで辿り着いた。そこからフォート・シンプソンまでの長く厳しい300マイルを、棺を運ぶには、もっとしっかり棺を橇に固定しなおす必要があった。一行は1日休んで翌日出発した。

3月15日の日暮れ頃、その日はピアーズの没後7周忌にあたっていたが、一隊はマッケンジー川の岸にそそり立つ岩場の上で宿泊することになった。急峻な30フィートほどの土手の上に、苦勞して寝具や食料を運び上げ、全員が協力して、氷をカットし松の枝葉をしき、焚き火用の薪を集めキャンプの準備に取りかかった。棺や橇は下に残し、犬たちは放してあった。彼らが準備に忙しく働いて10分か20分ほどたった頃、犬が吠え始める。先住民が来たのだらうと思うが、そのまま仕事を続ける。犬たちは相変わらず吠えているが、その吠え方は見知らぬ人間が接近してきたときのような激しい吠え方ではない。橇や犬たちを上から見ることは出来なかったが、マクファーレンは仲間のタイラーと、先住民がやって来たのだらうと話していた。その時、

われわれ全員が、はっきり「行け！」という声（フランス語の用語が、カナダ北西領では犬を使役したり橇を引かせる時に、ほとんどあまねく使われていることを言っておきたい）を聞いた。土手の下で誰かが、行く手を阻む犬たちを追い払うために発したようであった。みんな仕事の手を休めて誰が来たのか見ようとしたが、誰も姿を現さなかった⁽²⁾。

イロコイ族のトーマスとマクファーレンが見晴らしのよい高いところに登って下を見ると、驚いたことに誰もいなくて、犬たちが棺を乗せた橇から数フィート離れたところで何かに向かって吠えていた。吠えるのを止めさせるのに苦労したが、やがて犬たちは吠えるのを止めて急な土手を何とか登り切り、キャンプの場所までやってきた。その後は何も異常なことは起きなかった。

3月18日一行は適切なキャンプ地を見つけるために、暗くなってからさらに2時間旅を続けなければならなかった。やっとマッケンジー川にある大きな島の先端に手ごろな場所を見つけたが、土手を垂直に12フィートほど登らなければならなかった。荷物を載せた橇は、旅を続けたため軽くなっていたので、犬にもロープをつけて何とか一緒に引っ張り上げることに成功した。しかし棺だけは重すぎたので15日同様に置いたままだった。全員がキャンプの準備にとりかかりほぼ終わったころ、マクファーレンが少し離れたところから薪を集めて戻ると、タイラーが、川の方から2度ほど大きな呼び声か、叫び声を聞かなかったかと尋ねた。彼は風が強く藪が茂っていたので帽子の耳覆いをしっかり閉めていて、聞こえなかったと答えた。2人のイロコイ族の先住民も確かに声を聞いたと言ったので、みんなで土手の端まで行ってみたが、人影も見えず何も聞こえなかった。そこで彼らは直ちに、どんなに大変であろうと棺を土手の上にまで引っ張りあげる決心をした。実際そうするのは恐ろしく苦労したが、翌朝出発するとき、動かす前に棺が置かれていた場所にクズリ（北米産イタチ科の肉食動物）が夜出沒しえいたことを知る。マクファーレンは、クズリの破壊力を知る者は、棺を土手の上のキャンプ地に運んだことは賢明な判断だったと理解するだろうと述べている。

その後は何も異常なことが起こらず3月21日フォート・シンプソンへの長旅を終へ、23日に棺は近くの墓地に正式に埋葬された。マクファーレンとタイラーは、上司のバーナード・R. ロスに旅先に起こった異常な出来事をすべて話した。ロスは故ビアーズとは同郷人であり親しい友人であった。彼はまた物まねがうまく、記憶力も抜群であった。故人を真似てロスが、「行け」とフランス語で発声するとマクファーレンはすぐに3月15日に聞いた声と似ていることを認め、タイラーはまったく疑いを持たなかった。

話はまだ終わらない。フォート・シンプソン滞在中マクファーレンはロスと同じ部屋に泊まっていたが、最初の晩か次の晩、床につき明かりを消して、マクファーレンがロスと故人のことを話していると、彼は突然故ビアーズの霊の存在を、圧倒的に意識するようになる。あまりに突然で恐ろしかったので口もきけずに毛布を被っていた。その間わずか数秒だったと思われるが、同じように沈黙していたロスは興奮して何か異常な経験をしなかったかと聞いてくる。彼がそうだと答え、どんな感情を体験したか話すと、ロスは、実は自分もまったく同じ体験をしたと答える。2人が同時にそれも似たような悪夢を見たということは考えにくいし、2人とも酒を飲んでいなかった。

マクファーレンは「もし出来ればの話だが、私がここで述べた事実の合理的な解釈や説明を他の人間にまかせる」と書いている。しかし「もし死者の霊の中に、時として現世の場所を再訪することが許される者がいるという公理が想定されるなら」と、自分の解釈を披瀝している。要するにピアーズの霊が、重労働で腹をすかした犬や、あるいは貪欲なクズリに自分の遺体を食われてしまうことを防ぐために、声を発したということである。またフォート・シンプソン滞在中寝室で、故人の霊の存在をすぐそばに感じたことについては、マクファーレンとロスが、見つからなかった故人の遺言のことを話していたことなどから、おそらく何か情報を伝えなかったのだらうと推測している。だが2人とも恐怖に駆られ取り乱してしまったので、故人の幽霊から情報を得るチャンスを逃してしまったのである。

この報告書は細部の記述が、簡潔であるが要所を押さえて書かれている。全体の構成も、事件の発端から背景を含めその推移がきちんと書かれ、フィクションのように効果を狙った書き方ではないが、報告書として優れている。この報告書は何度も雑誌や本に取り上げられ、先にも触れたが半ば事実半ばフィクションと言う扱いを受けたことがある。しかしこの報告書には、必要な細部の情報を的確に記録しようとする、観察者としての気配りは感じられるが、重要な場面を強調しそうでない部分は出来るだけ切り詰める、つまり強弱をつけるという作家の姿勢は、感じ取れない。あくまでも事実を忠実に書きとめようとする姿勢に貫かれているのである。

報告書の信頼性というものが、ほとんどの場合唯一の判断材料なので、最も重要である。前にも触れたが最初に取り上げた故マッケンジー首相の幽霊との会話を、CBC トランス・カナダ放送で語ったパーシー・P. フィリップも、自分の話の内容がマスメディアによって、いかに歪曲されて報道されたかについて、同業者たちを厳しく批判している。つまり出来事を正確に伝えるということは難しいと認識しなければならない。これまで紹介してきた4つの報告書あるいは覚書は、実はまったく無作為に選択したわけではなく、まとまりがよく信頼できる報告を選んだのである。確かに最初の報告は、いくつかの新聞や雑誌の記事を、間違いも混乱もそのまま載せている。しかしそれは編集者が余計な手を加えずに、間違いや混乱の事実そのままを載せ、そのことを読者に認識して欲しかったのであろう。さらに既に紹介した通り、フィリップ自身の書いた1955年1月と12月の2つの記事に限れば、長年記事を書いてきた経験を覗わせる、まとまりもよいしっかりした文章である。報告者の信頼性について再確認すると、最初の報告書を書いたフィリップは24年間ニューヨーク・タイムズの記者を務め、報道に携わっていただけでなく、故マッケンジー首相とは極めて親しい間柄にあった。2番目の文章は『赤毛のアン』で世界的に有名な作家モントゴメリーの書いたもの。3番目の報告者はアルバータ大学の歴史学名誉教授ブラックレイ。4番目のマクファーレンは地域発展に貢献し、友人や先住民に慕われていた毛皮商人で、また王立地理学協会のフェローであった。そこで今度はあえて無作為に、視聴者電話参加番組での報告を取り上げてみたい。

(VI)

『カナダ幽霊物語』はバーバラ・スミスによって編集され、さらにリトールドされて、2001年に出版された最も新しい「本当の幽霊の話」である。バーバラは序文で次のように書いている。

私たちはみんな、私たちが生きている人生は、まとまりのよいものではないことを知っている。その結果これらの報告は、私たちが読み慣れているかもしれない物語より、少しばかりまとまりが悪くなる傾向がある。フィクションの幽霊物語ならば、あらかじめ、始まり、中間、結末と提示されるように構成されるだろう。個々に記録されている出来事はそのように秩序立てられることを拒否している。私に幽霊との出会いについて書き送ってきた人たちは、時として自らの体験にわれを忘れ、細部のすべて思い出すことは出来なくなっている⁽³⁾。

それでは、バーバラが1999年のハロウィーン（10月31日）の日に、彼女が関わっているラジオの視聴者電話参加番組で、ある女性から聞いた、オタワの幽霊屋敷の「パティ・ケーキ」という話を紹介したい。電話をかけてきたジュディという若い母親は、2年前に越してきた家で女の子の赤ちゃんをよく椅子で揺すりながらあやしていた。バーバラは子供がかかわっていると聞くと非常に興味をそえられる。というのはたいてい子供のほうが大人よりも霊の存在にたいして敏感で感受性も豊かであるからだ。母親のジュディは当時1才に満たない娘を、椅子に座って揺らしながらあやしていると、娘はよく両手を出してパティ・ケーキ遊び（日本の「むすんでひらいて」のような遊戯）をしていたが、どうも母親ではない誰か他の人間を相手にして遊んでいるようだった。ジュディにはその相手の姿も見えず、物音も聞こえず、匂いも嗅ぐことができなかった。彼女は「私はこれをいつもおかしなことだと思っていました」と電話で語った。

3才になった娘はもはやパティ・ケーキ遊びはしないが、「彼女は部屋の誰かと話しています」とジュディは語った。ジュディにはいまだにその姿は見えないが、娘に見えていることは、娘の視線が何者かを追って動くことから分かる。誰なのかと聞くと、叔父さんとかおじいさんだと答える。娘とその仲間はだいたい仲良くやっているようだが、ときにはいやがることもある。その何者かは娘の寝室を拠点にしているようだが、怖がらせる意図があるかは、はっきり分からない。しかし娘は夜にはとても怖がっている。ジュディも娘の視線がその何者かを追ったり、手を伸ばして触ったりするのを見るといらいらしてしまう。膝に乗せていると娘は背伸びしてジュディの背後を見るので、彼女も首をまわして後ろを見るが何も見えない。その何者かがどんな顔をしているのかと聞くと、娘は口をゆがめて老人のような顔つきをする。相手は誰なのかと聞くと、娘は知らないと答える。

バーバラは、話の終わりに、おそらくその娘は大きくなると幽霊を見る能力を失って、やがてはかつてのパティ・ケーキの遊び相手のことなど忘れてしまうだろうと付け加えている。

(VII)

これまで5つほど幽霊にまつわる報告や覚書を紹介してきた。もっと数多く紹介したかったが、原文の雰囲気になるべく損なわず、また細部の描写を極力省きたくなかったのがこうなった。というのは「本当の幽霊の話」というのは、それが口承で伝えられるにせよ、記録されるにせよ、細部の表現や描写が生命であるからだ。もっとも細部の表現や描写といっても、それらを長く続けることではない。こと幽霊の話となると、本来短い方がよいのである。だらだらと続けば、今か今かと固唾を呑んでいる聞き手や読者の恐怖心どころか興味も失せて、退屈なだけになる。もう1つ大切なのは、状況や心理を出来るだけ具体的に表現するのが効果的だ、ということである。こう書くと、フィクションの幽霊物語の場合と違わないではないと言われるだろう。その通りで、聞き手や読者に与える効果と言う点に就いては、程度の差はあるだろうが、「本当の幽霊の話」もフィクションの幽霊の話もそう変わらないのである。『カナダ幽霊物語』の編集者バーバラは序文の終わりの方で「(話を)楽しんで欲しいと思います。さまざまな感情を味わい、想像力を羽ばたかせて下さい。でも私が最も望んでいることは、私がリトールドした話を面白いと思いつきながら読んでいただくことです」と書いている。つまり「本当の幽霊の話」も当然のように楽しむために読むのである。

それではなぜカナダでは「本当の幽霊の話」が好まれるのであろうか。日本や中国では古くから怪異が文学の題材として取り上げられている。仏教説話集や物語類、能、怪談というジャンルの成立した江戸期の仮名草紙、浮世草紙などには幽霊や物の怪が頻繁に登場する。たとえば『源氏物語』の六条御息所の生霊など是有名である。また中国における六朝時代の志怪小説、唐代の伝奇小説などは怪事奇事を扱っている。総じて日本でも中国でも「本当の幽霊の話」は、文学的伝統の中に取り込まれ融合しているのである。冒頭で書いたように英国ではフィクションの幽霊物語に人気があり、特に19世紀末にはその人気はピークに達していた。カナダの隣国である米国でも、英国ゴシック小説の影響を受けたチャールズ・ブロックデン・ブラウンの『ウイーランド』(1798)、ゴシック小説の持つ雑多な要素の幾つかを、短篇の形式で発展させ恐怖小説、推理小説、ファンタジイなど新しいジャンルを創り出したエドガー・アラン・ポー、宇宙的恐怖を描いたH. P. ラヴクラフト、近くはステューヴン・キングなど、優れた作家たちが怪奇幻想文学の伝統を形成している。米国では「本当の幽霊の話」よりもフィクションの話の方が、明らかに人気があり幅をきかせている。

こうした強固な文学的伝統はカナダにはないようである。言い方を変え、カナダではいまだに「本当の幽霊の話」がフィクションの幽霊の話に、さほど侵食されずに人気を保っているということである。楽しむために読むのは同じであるとしても、はたして読者はSF、ファンタジイ、推理小説などを娯楽として楽しむようにだけ、読んでいたのであろうか。もっと厳密に言えば、別種の楽しみ方が付加されているのではないか。そうでなければ、遠からずフィクションの話の魅力に取って代わられるだろう。実は「本当の」という部分に魅力の焦点がある。前にも引用したが、読者の大多数は、「好奇心を持った探求者」であり、事実かもしれないという期待や、あるいは本当だろうかという疑

英米文学と日本文学の怪奇小説の比較研究——カナダにおける幽霊との出会いにかんする報告——

いを抱きながら読んでいく。こんな恐ろしいことやこんな不思議なことが、この世界で現実に起こったのなら凄いと興奮したり、あるいはこんな事が実際起こったなど、とても信じられないと思うのである。もちろん人により反応の仕方は様々であろう。しかし読者には、どのような判断を下すにせよ、またたとえ判断を保留するにせよ、少なくとも判断という点において主体的にかかわる余地がある。時には読者は、持てる知識や経験、推理力などを駆使して、推理小説のように犯人を当てるのではなく、事実かそうでないかを判定するのである。初めから虚構、フィクションだと決まっている話との違いがここにある。それこそ事実の重みであり好奇心を掻き立てる源である。だから語り口が多少まずくても、まとまりの悪い話であろうとも、読者は興味を失わずに読むことになる。

(注)

- (1) John Robert Colombo: *Mackenzie's Ghost and Other Personal Accounts of Canadian Hauntings* (Willowdale: Hounslow Press, 1991) p. 169.
- (2) John Robert Colombo: *Dark Visions* (Willowdale: Hounslow press, 1992) p. 33.
- (3) Barbara Smith: *Canadian Ghosst Storie* (Edmonton: Lone Pine Publishing, 2001) p. 9.

(かない・こうへい 理工学部教授)